

## 第二章 女性体験談

[第一段 女性体験談(左馬頭、嫉妬深い女の物語)]

「はやう(早う、昔)、まだいと下臈にはべりし時(まだ可なり下っ端だった時)、あはれと思ふ人はべりき(可愛いと思う女が居ました)。聞こえさせつるやうに(先ほど申したような類の女で)、容貌など(見た目など)いと(あまり)真面(まほ、上等)にも(では)はべらざりしかば(御座いませんでしたので)、若きほどの好き心には(若いうちの遊び心には)、この人を止まり(とまり、生涯の伴侶)にとも思ひ留め侍らず(とどめはべらず、定めきれず)、寄る辺(よるべ、囲いもの)とは思ひながら、さうざうしくて(物足りなくて)、とかく紛れ(まぎれ、気紛れ、気移り、浮気)はべりしを(しましたが)、もの怨じを(ものゑんじ、嫉妬を)いたく(酷く)し侍りしかば(致しましたので)、心づきなく(厭になって)、いと(もうどんなにか)かからで(こうではなくて)、おいらか(おっとり)ならましかばと(していてくれたらと)思ひつつ(思いましたが)、あまりいと(あまりにも)許しなく(厳しく)疑ひはべりしも(喧しく言って来ていたのを)煩くて(うるさくて、少なからず思い迷って)、かく(このような)数ならぬ身を(物の数にも入らぬ男を)見も放たで(見放さず)、などかくしも(なぜこれほどに)思ふらむと(こだわるのかと)、心苦しき折々もはべりて(済まない気にもなってきた)、自然に(じねんに、次第に)心(浮気心が)をさめらるる(おさめられていく)やうになむはべりし(ようにもなりました)。

この女の在る様(あるやう、大体が)、もとより(元々自分には)思ひいたらざりけることにも(良く分かっていない事でも)、いかでこの人のためにはと(何とかこの私の為にと)、なき手を出だし(無理もするし)、後れたる筋の心をも(苦手意識も)、なほ口惜しくは見えじと(悟られぬように)思ひはげみつつ(懸命に努力して)、とにかくにつけて(とにもかくにも)、ものまめやかに後見(行き届いた世話を心がけ)、つゆにても(つゆほども)心に違ふことは(私の意に沿わぬことは)なくもがなと(ないようにしておこうと)思へりしほどに(思っている内に)、進める方と思ひしかど(勝気な女と見ていたが)、とかくに(何でも)なびきて(言うことを聞いて)なよびゆき(しとやかに)なつて、醜き容貌をも(見た目の悪さも)、この人に見や(この私には)疎まれむと(嫌われまいと)、わりなく思ひ(せめてもと)つくろひ(化粧し)、疎き人(うときひと、慣れない人)に見え(みえ、会え)、面伏せ(おもぶせ、私の面目が立たない)にや(とも)思はれむと(思われないかと)、憚り恥ぢて(遠慮し恥じて顔を出さずにいるのを)、みさをにもつけて(節度ある態度だと)見馴るるままに(見暮らす内に)、心も(気立ても)けしうはあらず(先ず悪くは無い)はべりしかど(暮らしぶりでしたが)、ただこの憎き方(にくきかた、憎み方、嫉妬心)一つなむ(一つだけは)、心をさめずはべりし(収まることはありませんでした)。

そのかみ(其上、そこで)思ひはべりしやう(思ったのですが)、かう(こうも)あながちに(偏に)従ひ怖ぢたる人(したいおじたるひと、へつらつてばかりいるもの)なめり(であるなら)、いかで(何とか)懲るばかりの業(こるばかりのわざ、懲りるような真似を)して、おどして、この方(このかた、焼き餅焼き)もすこしよろしくもなり、さがなさ(口煩ささ)も止めむ(やめむ、止めよう)と思ひて、まことに憂し(まことにうし、本当に厭)なども思ひて(になったから、もう)絶えぬべき(別れようという)気色ならば(けしきならば、態度に出れば)、かばかり(ここまで)我に

従ふ心ならば(自分に従う気持ちがあるなら)思ひ懲りなむと思うたまへ得て(きっと反省するだろうと思って)、ことさらに(わざと)情けなく(ぞんざいな)つれなきさまを見せて、例の腹立ち怨ずるに(例の如く女が怒って喧しく言って来た時に)、

『かく(こう)おぞましくは(強情では)、いみじき(折角の)契り(縁が)深くとも、絶えてまた見じ(もう別れる他はあるまい)。限りと思はば(その積もりでなら)、かく(この)わりなき(無茶な)もの疑ひは(言い掛りも)せよ(勝手にするが良い)。行く先長く見えむ(みえむ、添い遂げよう)と思はば(と思うなら)、つらきことありとも、念じて(我慢して)なのめに(並目に、事荒立てずにと)思ひなりて(考えて)、かかる(こうした)心だに(嫉妬心さえ)失せなば(うしなせなば、消えてなくなるなら)、いと(本当に)あはれとなむ(いとほしいと)思ふべき(思えるものを)。人並々にもなり(人並みに暮らしも立ち)、すこし(さらに)おとなびむに添へて(出世するに連れて)、また並ぶ人なく(その正妻ということに)あるべき(なるわけだしな)』やうなど(などと)、かしこく教へたつるかなと(我ながら上手く教えたものだ)と思ひたまへて、我猛く(われだけく、凶に乗って)言ひそし(言い過ぎて)はべるに(しまいました)、すこしうち笑ひて(すると女は含み笑いを返して)、

『よろづに(万事に)見立てなく(みだてなく、見映えしない男の)、ものげなき(取るに足りない)ほどを(微禄の間を)見過ぐして(みすぐして、付き合っ)、人数なる(ひとかずなる、一角の者になる)世もやと(よもやと、日も来るのかと)待つ方は(まつかたは、待つ分には)、いと(よほど)のどかに(気長に)思ひなされて(思っいられて)、心やましく(気が滅入る事)もあらず(ありません)。つらき心(男の冷たい心)を忍びて(を堪えて)、思ひ直らむ折を見つけむと、年月を重ねむ当否頼み(あいなのだのみ、当てに為らない願ひ)は、いと(とても)苦しくなむ(辛いものであるべければ(御座いますから)、かたみに(互に)背きぬべき(そむきぬべき、別れるべき)きざみに(頃合い)なむある(なのでしょう)』

と妬げに(ねたげに、恨めしそうに)言ふに(言うので)、腹立たしくなりて、憎げなることどもを(此方も厭味の数々を)言ひ励まし(いいはげまし、散々言い立て)はべるに(ましたが)、女も厭(え、決して)収めぬ筋にて(をさめぬすじにて、引き下がらない性分)、**私の手を取ると**指(および)ひとつを引き寄せて喰ひて侍りし(くいてはべりし、噛み付いてきましたの)を、おどろおどろしく(私は大げさに)託ちて(かこちて、悲鳴を上げて)、

『かかる疵さへ(きずさえ)つきぬれば(付いたと為ると)、いよいよ交じらひを(役所での職場付合いを)すべきにもあらず(出来たものではない)。辱め給ふめる(はずかしめたもうめる、其方に傷付けられた)官(つかさ、職場)位(くらゐ、席次)、いとどしく(いよいよ以って)何につけてかは(何で身を立てれば)人めかむ(ひとめかむ、人並みに為れようか)。世を背きぬべき(世を捨てるべき=出家すべき)身なめり(身のようだ)』など言ひ脅して(などと殊更に公人を傷付けた咎を責め立てるような言い方で恥じ入りさせようと女を脅して)、『さらば、今日こそは限りなめれ(かぎりなめれ、分れ目と為るだろう)』と(と云ひ残して)、この指を屈めて(およびをかがめて、指を庇って)まかでぬ(家を出ました)。

『手を折りて、あひ見しことを数ふれば、これひとつやは君が憂きふし (和歌 2-1)

『貴方が噛んだ此の指が、思い出の数の折納め (意識 2-1)

え(よもや)うらみじ(恨むまいぞ)』など言ひはべれば(と私が捨て台詞を吐けば)、**女は**さすがにうち泣きて、

『憂きふしを、心ひとつに数へきて、こや君が手を別るべきをり』 (和歌 2-2)

『収め切れない悲しい壺を、無理に蓋して割れた手の傷』 (意識 2-2)

\*洒落で遊んでいる場合でも無さそうだが、両歌とも別れの折節を「指折り数える手の節」に掛けて詠んでいる。感情を客観視する余裕を風流というなら、これらもそれなりの趣はあるのかもしれない。

など、言ひ為ろひ(いいしろい、言い合って)はべりしかど(居りましたが)、まことには(本当には)変はる可きこと(かはるべきこと、暮らしを変えよう)とも思ひ給へず乍ら(たまえずながら、ませぬ内に)、日ごろ経る(ひごろふる、何日も過ぎる)まで消息(せうそこ、しょうそこ、手紙)も遣はさず、あくがれ(彼処離れ、そぞろに)まかり歩くに(出歩いていると)、臨時の祭(りんじのまつり、年の瀬真冬の賀茂社の酉の市)の調楽(てうがく、ちょうがく、奏楽練習)に(をする日があつて)、夜更けていみじう曇(みぞれ)降る夜、これかれ(各々其々)まかり(退席して)あかる(別れて帰る)所にて、思ひめぐらせば、なほ(やはり自分の)家路と思はむ方は(おもわんかたは、思い当たる所は)また(その女の家の他には)なかりけり(ありませんでした)。

内裏わたりの旅寝(うちわたりのたびね、御所の宿直所で休むのは)すさまじかるべく(寒々しい)、気色ばめるあたり(情婦の所)は漫ろ寒くや(そぞろさむくや、心が寒い)、と思ひたまへられしかば(と思われたので、女の許に帰りたくなって)、いかが思へると(どうしているかと)、気色も見がてら(様子を探りに)、雪をうち払ひつつ、なま(どうも)人悪ろく(ひとわるく、みつともなく)爪喰はる(つめくわる、爪を噛む、恥ずかしい)れど(けれど)、さりとも今宵日ごろの恨みは解けなむ、と思うたまへしに(と考えて出向いたところ)、火ほのかに壁に背け(寢室の灯火を用意して)、萎えたる衣ども(柔かそうな生地)の厚肥えたる(あつごえたる、綿入れ衣類を)、大なる籠(こ、中に香を焚いた駕籠)にうち掛けて、引き上ぐべきものの帷子(かたびら、仕切り布)などうち上げて(迎え入れの容を整え)、今宵ばかりやと(今宵あたりは私が帰るか)と、待ちける(待っていた)さまなり(様子でした)。さればよと(思った通り)と、心おごりするに(付け上がれば)、正身(しゃうじん、本人)はなし。さるべき(留守居の)女房どもばかり(女中だけが)とまりて(残っていて)、『親の家に(女主人は親御様の家に)、この夜さりなむ(ちょうど今晚移って)渡りぬる(行きました)』と答へはべり(と答えたのです)。

艶なる歌(えんなるうた、偲ばせる和歌)も詠まず(を詠み残すわけでもなく)、気色ばめる消息もせで(窺わせる手紙も置かずという)、いと(なかなか)直屋籠り(ひたやごもり、引き囲もりぶり)に情けなかりし(なさけなかりし、情けなくなつて)かば(来て)、あへなき心地して(気が抜けて)、さがなく(あのように口うるさく)許しなかりしも(責め立てていたのも)、我を疎みねと(態と自分を嫌わせようと)思ふ方の心やありけむと(思う女の心積もりだったのか)と、さしも(そうは)見たまへざりし(思っても見なかった)ことなれど(事ですが)、心やましきままに(腑に落ちぬままに)思ひはべりしに(考えていると)、着るべき物(が側に用意されていて、それを見る

と)、常よりも心留めたる(こころとどめたる、気を配った)色あひ、為様(しぎま、仕立て)いと(大変に)あらまほしくて(素晴らしくて)、さすがに(やはり)わが見捨ててむ後をさへなむ(私が見捨てた後でさえも)、思ひやり後見たりし(女は私を思って世話を焼いていたのです)。

さりとも(そういうことなら)、絶えて思ひ放つやうはあらじと(女はすっかり諦めきっているわけでもあるまいと)思うたまへて(考えまして)、とかく言ひはべりしを(そうこう云って水を向けてましたが)、背きもせずと(拒むわけでも無さそうに)、尋ねまどはさむとも(私を惑わそうと)隠れ忍びず(隠れることも無く、かといって)、かかやかしからず(そうは浮かれずに)答へ(いらえ)つつ、ただ、『ありしながらは(以前のような貴方では)、えなむ(とても)見過ぐすまじき(見過ごすことは出来ません)。あらためて(心を入れ替えて)のどかに(穏やかに=浮気などせず)思ひならばなむ(暮らそうと思われるなら)、あひ見るべき(また一緒になりましょう)』など言ひしを(などと言ってきたのを)、さりとも(それなら)え(まずまず)思ひ離れじと(脈は有るものと)思ひたまへしかば(思いましたので)、しばし懲らさむの心にて(少し懲らしめようと考えて)、『しか(そう)あらためむ(改める)』とも言はず、いたく(だいぶ)綱引きて(強引に手懐け様と)見せしあひだに(していた間に)、いといたく(女は相当酷く)思ひ嘆きて(嘆き悲しんで)、はかなくなりはべりにしかば(そのまま死んでしまいましたので)、戯れにくく(たはぶれにくく、戯れの駆け引きは難しい)なむ(ものと)おぼえはべりし(後悔の念を覚えました)。

ひとへに(生涯)うち頼みたらむ方は(頼りにすべき女としては)、さばかりにて(あのようなものこそ)ありぬべくなむ(相応しいものと)思ひたまへ出でらるる(思い出されてなりません)。はかなきあだ事をも(浮かれ事も)まことの大事をも(極まり事も)、言ひあはせたるに(相談すれば)かひなからず(それなりの答えがあつて)、龍田姫(たつたひめ、竜田山を紅葉に染める秋の女神で染色名人)と言はむにも(と言つても)つきなからず(言い過ぎでもない程に衣類や調度の色合わせが巧みで)、織女(たなばた、織物名人)の手にも劣るまじく其の方も具して(そのかたもぐして、其の方面も上手で)、うるさくなむ(障りなく)はべりし(支度していました)」

とて(馬頭はこのように言って)、いと(たいそう)あはれと(感慨深そうに)思ひ出でたり(思い出に浸っていた)。中将(すると中将が)、

「その織女(に準えた女)の裁ち縫ふ方を(たちぬうかたを、技量の程は)のどめて(述止めて、さて置いて)、長き契りにぞ(織姫彦星の宿縁にこそ)あえまし(準えたかったものだ)。げに(実に)、その龍田姫(に準えた女)の錦(にしき、を飾る賢女振り)には、また如く者(しくもの、及ぶ者)あらじ(ないだろう)。はかなき花(はな)紅葉(もみじ)といふも、をりふしの(時々)色あひ(折り合い)付き無く(つきなく、そぐわず)、はかばかしからぬは(迷っている間に)、露のはえなく消えぬるわざなり(栄えある日を迎えぬまま露に映る間もなく果敢無げに消えてしまうものだ)。さあるにより(しかし、そうだからといって)、難き世とは(難しい世の中とばかりは)定めかねたるぞや(決め付けたものではないぞ)」

と(と言って)、言ひはやしたまふ(馬頭に別の話を促した)。

[第二段 左馬頭の体験談(浮気な女の物語)]

「さて、また同じころ、まかり通ひし所(の女)は、人も立ち勝り(ひともたちまさり、人柄良く)心ばせ(品格も)まことに(本当に)ゆゑありと見えぬべく(育ちの良さが窺がえる者で)、うち詠み(和歌も)、走り書き(はしりかき、手紙も)、掻い弾く爪音(かいひくつまおと、琴弾きも)、手つき口つき、みな(どれも)たどたどしからず(確かだと)、見聞きわたりはべりき(予てから聞き及び目にもして居りました)。見る目も事もなく侍りしかば(見た目も無難でしたので)、このさがな者を(本妻の口煩い女を)、うちとけたる方にて(くつろぎ所にして)、時々隠ろへ見はべりしほどは(此方へは時々隠れて会っているといった内は)、こよなく(格別)心とまりはべりき(気になって居た女でした)。この人亡せて後(本妻が亡くなった後)、いかがはせむ(どうしようにも)、あはれながらも(いくら偲んでみても)過ぎぬるは(逝った人は)甲斐なくて(かひなくて、戻ってこない)、しばしばまかり馴るるには(此の女の方へ以前より頻繁に通い慣れて来ると)、すこしまばゆく(少し派手で)艶に好ましきことは(色好みめくことが)、目につかぬ所あるに(鼻に付き出して)、うち頼むべくは見えぬ(くつろぎ所には思えず)、離れ離れに(かれがれに、途絶えがち)のみ(だけ)見せはべるほどに(会っておりましたら、その女には)、忍びて(隠れて)心交はせる(心を通わせる)人ぞありけらし(別の男が居たらしいのです)。

神無月(かんなづき、旧暦10月は現在の11月に当たる)のころほひ(頃合)、月おもしろかりし夜(月のきれいな夜、望月は十五夜なので其の前後)、内裏よりまかではべるに(御所から帰ろうとすると)、ある上人(うえびと、同僚が)来あひて(来合わせたので)、この車にあひ乗りてはべれば(私の牛車に同乗したのですが)、大納言の家(に)まかり泊まらむとするに(私が実家の大納言家に帰って泊まろうと思っていたところ)、この人言ふやう(其の同僚が言うには)、『今宵人待つらむ宿なむ(今夜は女が待っている宿があつて)、あやしく心苦しき(ちょっとそっちに)』とて(とのことで、その宿の方へ車を向けましたが)、この女の家はた(例の女の家がまた)、避きぬ道(よきぬみち、ちょうど其の通り道)なりければ(に当たっていたので)、荒れたる崩れより池の水かげ見えて(かげみえて、月影が映っていて)、月だに宿る住処を(月さえ宿にする此処の棲み家を)過ぎむもさすがにて(通り過ぎるに偲び無く)、下りはべりぬかし(何と其処で降りると言う同僚と共に私も車を降りたのです)。

もとより(ということは此処の女が前から)さる心を交はせるにやありけむ(言い交わしていた男ということになる)、この男(ときたら)いたく(だいぶ)すずろきて(浮かれ気分で)、門近き(かどちかき)廊の(らうの、つなぎ廊下の)簀子だつものに(すのこだつものに、縁側に)尻かけて(しりかけて、腰掛けて)、とばかり(さてといった様子で)月を見る(月を眺めたものなのです)。菊いとおもしろく移ろひわたり(確かに当夜は菊の花々が月光に色を変えては)、風に競へる(きほへる、舞い散る)紅葉の乱れなど、あはれと(なかなかの風情と)、げに見えたり(実に見映えのあるものではありましたが)。

懐なりける笛取り出でて(男は懐から笛を取り出して)吹き鳴らし『蔭もよし(かげもよし、という宿乞いの歌)』など綴りし謡ふ(つづりしうたう、吹き歌う)ほどに、よく鳴る和琴を(わごんを、女がいい音色の六弦の琴を)、調べととのへたりける(予め駒を合わせてあつた様で)、うるはしく掻き合はせたりしほど(見事に弾き合わせ出した所など)、けしうはあらずかし(なかなか)

の趣ではありました)。律の調べ(りちのしらべ、明るく大らかな曲、律は陽音階で呂は陰音階)は、女のものやはらかに搔き鳴らして、簾の内(すのうち、すだれの中)より聞こえたるも(奥床しく重々しくも聞こえるものの)、今めきたる物の声なれば(今風の軽い音色なので)、清く澄める月に折つきなからず(不似合いでもありませんでした)。男いたく(大いに)めでて(興に乗って)、簾のもとに歩み来て、

『庭の紅葉こそ、踏み分けたる跡もなけれ(誰も、といっても私、馬頭のことだが、来た様子が無い=今夜は未だ待ち人来たらずですね)』など妬たます(ねたます、ように軽口をたたいて女をからかった)。菊を折りて(そして菊を手折ると、)、

『琴の音も 月も えならぬ(得難ぬ)宿ながら、つれなき人を ひきやとめける (和歌 2-3)

『琴を弾いても釣れ無い人を 引くも月夜の愛想尽き (意識 2-3)

悪ろかめり(違いましたか)』など言ひて、『今ひと声(もう一曲)、聞き囃すべき人(ききはやすべきひと、聞き上手)のある時(が此処に居りますので)、手な残いたまひそ(出し惜しみ為されますな)』など、いたく(さらに)あざれかかれば(悪乗りすれば)、女、いたう(殊更に)声つくろひて(作り声で)、

『木枯に吹きあはすめる笛の音を、ひきとどむべき言の葉ぞなき』(和歌 2-4)

『愛想尽かしに爪弾く琴(言)の 葉の一枚まで木枯らす横笛』(意識 2-4)

となまめき交はずに(などと応えて二人で面白そうに戯れていて)、憎くなるをも知らで(それを私が憎憎しく思っているとも知らずに)、また、箏の琴(そうのこと、十三弦の琴)を盤渉調(ばんしきてう、という調子)に調べて(調弦して)、今めかしく搔い弾きたる爪音、かどなきにはあらねど(そつ無くこなしていましたが)、まばゆき心地なむ(私にはあざとく)しはべりし(感じられました)。

ただ時々(ただ挨拶がてら)うち語らふ(気楽に話す)宮仕へ人(みやづかへびと、宮中の女房女中)などの、あくまで戯ればみ(ざればみ、派手好みの)好きたるは(遊び人といったところの此処の女は)、さても見る限りは(その限りでは)をかしくもありぬべし(魅力的でした)。時々にても(でも今は偶にでも)、さる所にて(今までのように)忘れぬよすが(囲い者)と思ひたまへむには(と致しますには)、頼もしげなく(落ち着きが無く)さし過ぐいたり(艶やか過ぎる)と心おかれて(と厭に為って)、その夜のことに言付けて(ことつけて、持ち出して)こそ(きっぱり)、まかり絶えにしか(通うのを止めました)。

この二つのこと(二人の女)を思うたまへあはするに(考え合わせると)、若き時の心にだに(こころにだに、気持ちでさえ)、なほ(やはり)さやうに(左様に、後の女のように)もて出でたることは(色気多くモテる女は)、いと(どうも)あやしく(不安で)頼もしげなく(頼りなく)おぼえはべりき(思えたものです)。今より後は(年なので)、まして(いっそう)さのみなむ(そのようにばかり)思ひたまへらるべき(考えていくことでしょう)。御心のままに(貴殿らの趣くままに)、折ら

ば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見る玉笹の上の霰(あられ)などの、艶に(えんに、瑞々しく)あえか(はかな気な)なる好き好きしき(すきずきしき、風情)のみこそ、をかしく(興味深く)思さるらめ(お思いでしょうが)、今さりと(今はそうでも)、七年(ななとせ)あまりが程に(ほどに、経ったくらいに)思し知りはべなむ(お分かりになるでしょう)。なにがしが(私如き下級の輩が)いやしき諫めにて(下世話な忠告にて)、好き(風流に)たわめらむ(流される)女に心置かせ給へ(こころおかせたまえ、お気をつけ下さい)。過ちして(多情な女の色恋沙汰で)、見む人の(相手の男の)かたくななる名(汚名)をも(までも)立てつべき(広めてしまう)ものなり(ものです)」

と戒む(いましむ、と馬頭は貴人の君と中将を戒めた)。中将、例のうなづく(例によって頷いた)。君すこし片笑みて(かたえみて、苦笑いして)、さること(馬頭の言い分にも)とは(一理はあるかとは)思すべかめり(思われたようだったが、良く分からなかったのかもしれない)。

「いづ方につけても(どちらの話しも)、人悪ろく(人聞きの悪い)はしたなかりける(始末の悪い)身物語(みものがたり、身の上話)かな(ですね)」とて(と源氏の君は言って)、うち笑ひおはさうず(座を笑わせて居られました)。

### [第三段 頭中将の体験談(常夏の女の物語)]

中将、「なにがしは(では私も一つ)、痴者(しれもの、愚か者)の物語をせむ(の話をしましょう)」とて、「いと(本当に)忍びて(隠れて通う)見そめたりし人の(気に入った女が居て)、さても(そうした遊び相手に)見つべかりし(見てもよさそうな)けはひなりし(様子をして)いた)かば(ので、ながらふべきもの(長く付き合うもの)としも(としては)思ひたまへざりし(思っておりませんでした)かど(けれど)、馴れゆくままに、あはれとおぼえしかば(いとしく思えてきましたので)、絶え絶え(ながらも)忘れぬものに思ひたまへしを(通い続けていたところ)、さばかりに(そのくらいの付き合いに)なれば、うち頼める(私を頼ってくる)けしきも見えき(様にもなりました)。頼むにつけては(女にしてみれば、私の面倒見が悪いので)、恨めしと思ふこともあらむと、心ながら(我ながら)おぼゆる(思い当たる)をりをりも(事々も)はべりしを(ありましたが)、見知らぬやうにて(女は平気な様子で)、久しきとだえをも(しばらく通わなくても)、かう(こうも)たまさかなる人(偶にしか来ない人)とも思ひたらず(とも思えないほど)、ただ朝夕に(いつも訪ねた時の出迎えと見送りに)もてつけたらむ(不足ない用意をしている)ありさまに見えて、心苦しかりしかば(済まない気になったので)、頼めわたる(私から女に頼ませるように仕向ける)ことなどもありきかし(事などが在ったくらいです)。

親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと(私を頼りに)、事にふれて思へるさまも(思っている女の様子も)らうたげなりき(いじらしかった)。かう(こうして)のどけきに(何事も無く)おだしくて(穏やかに暮らして)、久しくまからざりしころ(長い間訪ねなかった頃)、この見たまふる(私の面倒を見て下されている)辺り(わたり、右大臣家)より、情けなく(心無い)うたてあること(悲しい事)をなむ(といったものを其の女に)、さる(とある)たよりありて(伝を使って)かすめ言はせたりける(それとなく言わせたという事を)、後にこそ(後になって)聞きはべりしか(聞き及びました)。

さる憂きことやあらむとも知らず(そんな厭な事があつたとは知らず)、心には忘れずながら(思いはありながら)、消息などもせで(手紙も送らずに)久しくはべりしに(長い間居たところ)、むげに(女はひどく)思ひしをれて(弱気になって)心細かりければ(心配して)、幼き者(女と自分との子供)などもありしに(などもいたので)思ひわづらひて(思い悩んで)、撫子の花を折りて遣せたりし(おこせたりし、送ってきました)」とて涙ぐみたり(涙ぐんだ)。

「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば(と源氏の君が中将にお尋ねになると)、  
「いさや(いえ)、ことなることもなかりきや(別に殊為る事も無かつたのですが、こんな歌を詠んで来たのです)。

『山がつの垣穂(かきほ)荒るとも折々に、あはれはかけよ撫子の露』(和歌 2-5)

『垣穂も荒れた山里に 思いも掛けぬ撫子の花』(意識 2-5)

\*「やまがつ」は木こり、または其の家。詠者の女自身の謙称。「垣穂」は仕切り垣、垣根。

思ひ出でしままに(それで早速、思い出すままに)まかりたりしかば(女の家に出かけてみると)、例の(いつもの)うらもなき(無心な)ものから(様子ながら)、いと(ひどく)物思ひ顔にて(浮かない顔つきで)、荒れたる家の(質素な家の)露しげきを(秋露深い庭を)眺めて、虫の音に競へる(ような女の泣き顔の)けしき(様子は)、昔物語めきて(まるで昔話の寂しい情景の絵を見るような典型的な風情に)おぼえはべりし(感じられたものです、そこで)。

『咲きまじる色はいづれと分かねども、なほ常夏にしくものぞなき』(和歌 2-6)

『撫でし子を寝かし付けては床を敷く、常夏に如く色合いは無し』(意識 2-6)

\*「常夏とこなつ」は「撫子なでしこ」の異名。撫子が夏から秋に掛けて花を付けることに由来する。但し此处では、撫子=子、常夏=女親、を指す。また撫子は、薄紫地に紅を上重ね着する色合わせ、その色目自体の名称。

と、返しては<sup>と</sup>大和撫子をばさしおきて、まづ『\*塵をだに』など、親の心をとる(親の機嫌を取った、わけです、すると女が)。 \*「塵をだに」は、床の塵を払うと男が訪ねて来る、という俗信を下敷きに、「まず塵を払う」という言い方で、これからは疎遠にしないという気持を伝えた、という意味。

『うち払ふ袖も露けき常夏に、あらし吹きそふ秋も来にけり』(和歌 2-7)

『袖も乾かぬ常夏に、嵐まで吹く秋が来るとは』(意識 2-7)

とはかなげに言ひなして(と頼り無さそうに言うばかりで)、まめまめしく(真面真面しく、面と向かって)恨みたるさまも見えず。涙をもらし落としても、いと(とても)恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは(自分が辛そうだと私に思われるのが)、わりなく苦しきものと(自愛や自尊心が強すぎる所為なのか此の女にはどうにも厭なように)思ひたりしかば(私には見えたので)、心やすくて(特別には思わないようにして)、またとだえ置き



はべりしほどに(また途絶えたままにして置いた内に)、跡もなくこそ かき消ちて失せにしか(跡形も無く消え失せてしまっていました)。

まだ世にあらば(まだ生きていれば)、はかなき世にぞ(当てなく世間を)さすらふらむ(さまよっているだろう)。あはれと思ひしほどに(可哀相には思うのだが、むしろ此の親子が)、わづらはしげに(煩わしく)思ひまとはす(思い惑わす)けしき見えましかば(態度を見せていたら)、かくも(こうも)あくがらさざらまし(行方知れずにはさせなかったものを)。こよなき(これほどまで)とだえおかず(間を置かずに訪ねて)、さるものにしなして(それなりに囲って)長く見るやうも(長く面倒を見る様にも)はべりなまし(したことだろう)。かの撫子の労たく(らうたく、かわいらしく)はべりしかば(していたので)、いかで尋ねむと(何とか探し出そうと)思ひたまふるを(思っておりますが)、今も(今なお)えこそ(噂一つ)聞きつけはべらね(耳にして居りません)。

これこそ(これこそが)のたまへつる(さっきの話に出た)はかなき(遣る瀬無い)例なめれ(ためしなめれ、例でしょう)。つれなくてつらし(疎遠で悲しい)と思ひける(と知っている女の本心)も知らで(も知らないで)、あはれ絶えざりしも(私が勝手に愛しく思い続けたのも)、益なき(やくなき、困ったことに、思い違いの)片思ひなりけり(片思い同士でした)。今やうやう(ようやく私は)忘れゆく際に(忘れかけていますが)、かれ(あの女は)はた(まだ)えしも(今でも)思ひ離れず、折々人やりならぬ(ひとり思いつめて)胸焦がるる夕べも あらむとおぼえはべり(在ろうかと思われます)。これなむ(この女などは)、え(およそ)保つまじく(長く付き合えない)頼もしげなき方なりける(頼りにならない女ということになります)。

されば(さて、ところで)、かの(馬頭の)さがな者も、思ひ出である方に(思い出す分には)忘れがたけれど、さしあたりて(実際に会って)見むには(付き合うと為ると)わづらはしくよ(煩わしそうだし)、よくせずは(悪くすれば)、飽きたきことも(嫌気が差すことも)ありなむや(あるのではないのでしょうか)。琴の音すすめけむ(優れた)かどかどしさも(才女も)、好きたる罪重かるべし(浮気の罪は重いですよ)。この(私の)心もとなき(女)も、疑ひ添ふべければ(本心が分かり難いので)、いづれとつひに思ひ定めずなりぬるこそ(どれが良いとは結局のところ決められないものです)。世の中や(およそ男女の仲というものは)、ただ(これが)かくこそ(こうだと)、とりどりに(其々を)比べ苦し(くらべぐるし、比べて言い切ることなど出来ない)かるべき(でしょう)。このさまさまの良き限りを(よきかぎり、長所だけを)とり具し(備えて)、難ずべき(なんずべき、非難すべき)くさはひ(種、欠点)まぜぬ人は(持ち合わせぬなどという人は)、いづこにかはあらむ(何処に居ようか)。吉祥天女(きちじゃうてんによ、完全美神)を思ひかけむ(理想)とすれば、法気づき(ほうけづき、抹香臭くなり)、くすしからむ(奇しからむ、神妙でなく人間臭いから)こそ、また、わびしかりぬ(侘びしかりぬ、興醒めしない興味深い)べけれ(ものと為りましよう)とて(との中将の弁に)、皆笑ひぬ(皆笑った)。

#### [第四段 式部丞の体験談(畏れ多い女の物語)]

「式部がところにぞ(式部の所にも)、けしきある(色っぽい)ことはあらむ(話はあるだろう)。すこしづつ語り申せ(少し話してみろ)」と責めらる(と今度は、今まで黙っていた式部をけしかけるように中将が\*座を進めた)。\*ここで、この座をもう一度見直して、人間関係を確かめておく。この場所

は後宮の東北隅にある淑景舎で、この座の首席はこの部屋の住人にして帝の御子なる源氏の君に他ならない。ただし源氏は座中最年少者で、作中前後の推定で17歳とされている。次席は源氏の義兄にして、左大臣の実子にして、右大臣家の婿たる宮腹の中将である。年齢は源氏より6歳くらい年上と推定されるので23歳と見ておこう。この二人は近衛中将という重職に居たが、それは宮廷内秩序に見合う名目で、警察実務を担うわけではなく、実態は何よりも血筋がいい別格の貴人だったということだろう。実際、後宮に部屋を宛がわれているなど文字通りの雲上人ぶりだ。第三席は左馬頭で厩舎長官という軍事官僚で、出世を果たした実務者のような話しぶりもあったが、それも二人の貴人から見ればというほどで、大納言家の子弟とも思われる上流貴族である。年齢は上席の君や中将が敬意を持って応対していることで座中最年長者と目されるが、話の纏めに説教臭いが7年もすれば分かるでしょうと中将に言っていたので、中将の七歳上の30歳前後といったところか。そして末席が、この式部丞である。三人に比べれば官位は低いが要職であり、後宮に出入りできる家柄の者には違いない。中将が下に見ているのは、むしろ同年か年少者に対する態度と思われるので21歳前後と見ておこう。

「下が下の中には(下の下の身分に居る私などには)、なでふことか(なじょうことか、何と言う事か、とてもそんな)、聞こし召しどころ(お聞かせするような話は)はべらむ(御座いません)」

と言へど(と式部が言ったが)、\*頭の君(とうのきみ、宮腹の中将)、まめやかに(それでは済まされずに)「遅し(遅いぞ)」と責めたまへば(と催促されたので)、何事を(式部は一体何を)とり申さむと(話したものと)思ひめぐらすに、 \*「頭の君」という呼称は此处で初めて言われる。宮腹の中將のこととされる。此处まで当官職について何も語られていないので、少し唐突な印象も受けるが、当時の宮廷内に宮腹の中將に相当する人が実在したか、または一般的な常識として撰関家の子弟が就く官職として、この官職が認識されていたことに拠るのかもしれない。この官職とは、蔵人所(くらうどころ、近侍管掌事務所)の所長、頭かしらという重職のことをいう。近侍は元々が帝の私的な側用人で身の回りの世話人だったが、内裏が行政府から王朝へ変容する中で、実際の禁中では役人の上に立つ席次と為った。つまり蔵人所の所長は別格の雲の上人となり、その呼称も一般役所の所長たる頭をいう「かみ」ではなく、敢えて「とう」と特別扱った。宮腹の中將は其の血筋からして此の時点で此の榮譽職に就いていたようで、「頭中将(とうのちゅうじょう)」という職名の特権を与えられていたようだ。が、時の頭中将といえれば自動的に宮腹の中將を指す、とまでは言えないだろうから、いくらかの脱稿は疑わしい。

「まだ文章生(もんじゃうのしやう、式部省大学寮の有給学生)にはべりし時(でございました時に)、かしこき女の例(ためし、賢い女の見本)をなむ(とでもいうべき女を)見たまへし(見知りしました)。かの(先程の嫉妬深い女ということで)、馬頭の申し給へるやうに(馬頭が申されたように此の女も)、公事(おほやげごと、宮中事例)をも言ひあはせ(でも相談して)、私ざま(わたくしざま、私事)の世に住まふべき(暮らし方の)心おきて(心構え)を思ひめぐらさむ方も(考える面でも)いたり深く(造詣深く)、才の際(ざいのきわ、漢文の学問)なまなまの(まだ浅く名ばかりの)博士(はかせ、識者身分でしかない私など)恥づかしく、すべて口あかす(何も口出し)べくなむ(出来ない)はべらざりし(ありさまでした)。

それは、ある博士のもとに(家に)学問など(勉強を)し侍るとて(致すべく)、まかり通ひしほどに(通い出て居りました所)、主人(あるじ、たる博士)のむすめども多かりと聞きたまへて、はかなきついでに(とある折に其の娘の一人に)言ひ寄りてはべりしを(言い寄ってみたのですが)、親聞きつけて、盃持て出でて、『わが両つの途歌ふを聴け(という結婚を勧める白楽天の漢詩の歌)』

となむ(というものを)、聞こえごち(聞かせ付けて)はべりしかど(参りましたが)、をさをさ(思うように)うちとけてもまからず(打ち解けることが出来ず)、かの親の心を憚りて(ただ其の親の気持ちを気遣って)、さすがに(それでも)かかづらひはべりしほどに(付き合っていました)、いとあはれに思ひ後見(其の女がたいそう手厚く世話を焼き)、寢覚(ねざめ、をする寢室)の語らひにも、身の才つき(学が身に付き)、朝廷(おほやけ)に仕うまつるべき道々しきこと(実際の作法)を教へて、いと(たいへん)清げに(きよげに、きれいに)消息文(せうそこぶみ、手紙)にも仮名(かんな)といふもの書きませず、むべむべしく(正式の)言ひまはし(漢文体で著して)はべるに(あるので)、おのづから(ついつい)え(とても)まかり絶えで(別れ切れず)、その者を師としてなむ、わづかなる(少しばかりの)腰折文(こしをれぶみ、下手な漢詩文)作ることなど習ひ侍りしかば、今にその恩は忘れ侍らねど、なつかしき妻子と(分相応の家族と)うち頼まむには(心の拠り所とするには)、無才の人(むさいのひと、無学の私にとって)、なま(板に付かない)悪ろならむ(間違った)振る舞ひなど見えむに(身の処し方でしょうから)、恥づかしくなむ見えはべりし(どうにも気が引けました)。まいて(いや、もっとも)君達の御ため(お二人ほどの身分の高い方々には)、はかばかしくしたたかなる御後見は(此の女のような細かくて喧しい世話焼きなどは)、何にか(最初から)せさせたまはむ(要らないものでしょう)。はかなし(役立たずやら)、口惜し(愚かしいなど)、とかつ見つつも(冷めた目で見つつも)、ただわが心につき(なんとなく気に入って)、宿世(すくせ)の引く方はべるめれば(縁を結ぶ事も在るのですから)、男しもなむ(をのこしもなむ、男などというものは)、仔細なきものははべめる(他愛ないものと存じます)」

と申せば(そう式部が話しを纏めようとする)、残りを言はせむとて(中将は残りを言わせようとして)、「さてさて(それはまた)をかしかりける女かな(面白そうな女だよね)」と賺い給ふ(すかいたまう、態とらしく為さるの)を、心は得ながら(式部も中将の煽りを敢えて受けて)、\*鼻の辺りを小突きて(はなのわたりをこづきて)語りなす(話を継いだ)。 \*一般に、鼻に手を遣るしぐさは、顔を隠したい心理から来るという。とするとこれは、無理に話しをさせようとする中将のあざとさに対する思いと、それに乗ろうとする自分の追従や自負や虚栄に対する気持ちなど、文人らしい複雑な心理を持ち、且つ其れを気取られたくないという式部の様子を、見たかのように然り気なく表現した語り口か。

「さて(まあ、其の女のところへは)、いと久しくまからざりしに(かなり長いこと出向きませんでした)、もののたよりに(序での折に)立ち寄りてはべれば、常の(いつもの)うちとけゐたる方に(くつろいでいた部屋に)ははべらで(居なくて)、心やましき(邪魔臭い)物越しにて(几帳越しの)なむ(状態で)逢ひてはべる(逢ったのです)。\*ふすぶるにやと(無沙汰で妬いているのかと)、\*をこがましくも(可笑しくも思い)、また、よきふしなりとも(それならそれで決着を付ける良い機会とも)思ひたまふるに(思いましたが)、このさかし人はた(さかしびと、この賢女にあっては)、軽々しき(妙な邪推で)もの怨じすべき(嫉妬するような人)にもあらず、世の道理(よのだうり、男女の納まり)を思ひとりて(心得ていて)恨みざりけり(私を無闇に恨むことはありませんでした)。声も逸りか(はやりか)にて言ふやう(で、声も気忙しく)、 \*「ふすぶ」は古語辞典によれば、<煙を立てる>ことらしく、<いぶる・くすぶる>という物理状態を示し、<きげん悪くいさかいする>ことに例えられ、<嫉妬する・妬く>という心理状態をも示す、らしい。 \*「をこがまし」は古語辞典によれば、「をこ(愚か・滑稽・奇妙)」「がまし(めいている)」なので<可らしい・笑える>が本義で、そのことから<差し出がましい・出過ぎている>にも転じる、とある。

『月ごろ、風病(ふびやう、風邪)重きに堪へかねて、極熱(ごくねち、高温を催して解熱する目論見)の草薬(さうやく、多くはニンニク大蒜オオヒル)を服して(ぶくして、飲んで)、いと臭きによりなむ(ひどい臭いですので)、え対面賜はらぬ(とても御会い致しかねます)。目のあたりならずとも(目近ではなく物越しにても)、さるべからむ(そこそこの)雑事らは(ざふじ、雑用などでしたら)承らむ(うけたまはらむ、お引受け致します)』 \*この女の台詞は逐語で意味を拾ったが、「風病重きに」「極熱の草薬を服して」「え対面賜はらぬ」という、場違いの堅苦しい言葉遣いをする漢学博士の娘の奇妙さを表現している、のだろう。落語の「たらちね」を思い出す。ただ、藤原為時が高名な漢学博士である式部省の官僚で、この物語の作者がその娘とされる事を重ねると、言外に作者自身は「私は本物の教養人だから、そんな‘をこがまし’い言葉遣いはしない」と自信をのぞかせている、ようにも思える。

と、いと(ずいぶん)あはれに(殊勝に)むべむべしく(畏まって)言ひはべり(言うのです)。答へに何とかは(いらへになんとかは、私には答えようもありませんでした)。ただ、『承りぬ(分かりました)』とて(と言って)、立ち出ではべるに(立ち去ろうとすると)、さうざうしくやおぼえけむ(女は胸が騒いだか)、

『この香失せなむ時に立ち寄りたまへ(この臭いが消える頃にお立ち寄り下さい)』と高やかに言ふを(と声を立てて言うのを)、聞き過ぐさむもいとほし(聞き過ぎすのも気の毒など)、しばし休らふべきに(しばしためらえど)、はたはべらねば(また止まれば)、げに(まことに)そのにほひさへ(其の臭いと来たら)、はなやかにたち添へるも術なくて(すべなくて、とてもそんな芳しい代物である筈も無く)、逃げ目をつかひて(今が逃げ時と見て)、

『ささがにの ふるまひ(振舞)しるき夕暮れに、ひるま過ぐせといふがあやなさ (和歌 2-8)

『クモの動きが知らせと識れば、ひるを遣り過ご笹る夕暮れ (意識 2-8)

\*「ささがに」は細蟹で形状似から「蜘蛛クモ」の異名。クモが動くと言男が来ると言う俗信を下敷きにした歌。ただ枕詞で「笹が根の」と言えば蜘蛛に掛かるらしく、「笹が根=草の根」ということで草薬に通じ、「笹が根の振る舞い」とあった方が「女が薬を使ったこと」を意味して、発句としては納得しやすい。だから其う解す。ただし「笹」はイネ科で「蒜ヒル」はユリ科とのこと。「ひるま」は「昼間」と「ニンニクが臭い内」。「あやなし」は筋目が無い、道理が無い。通せば、「大蒜を炊いたなら蜘蛛の動きで私が来る事が分かっただろうに、夕暮れになってもまだニンニクが臭い昼間だから会えないとは理屈に合わない」、と理屈っぽい。

如何なる言付けぞや(こんな臭くしてるのに、また来てネとは何云ってんだか)』と(との捨て台詞を)、言ひも果てず(云い終わらぬうちに)走り出ではべりぬるに(逃げ出しましたところ)、追ひて(女は女中に私を追い掛けさせて、こう返してきました)、

『逢ふことの夜をし隔てぬ仲ならば、ひる間も何かまばゆからまし』(和歌 2-9)

『夜も飽かずに逢いに来るなら、何もひるから隔てや為まい』(意識 2-9)

さすがに口疾く(くちとく、すばやい返歌)などは(だとは)はべりき(思いました)』

と、しづしづと申せば(式部は淡々と話したが)、君達あさましと思ひて(公達は余りにもの臭い話に呆れて)、「嘘言(そらごと、作り話は止せ)」とて笑ひたまふ(と言って一笑に付された)。

「いづこのさる女かあるべき(何処にそんな女が居るものか)。おいらかに(大人しく)鬼(おに、隠れた女)とこそ向かひゐたらめ(向かい合っていれば良い、病気なら大人しく隠れていれば良いものを)。むくつけきこと(気色悪いムカツク話しだ)」

と(と中将は)爪弾き(つまはじき、厄除けのしぐさ)をして、「言はむ方なし(まったくもう)」と、式部をあはめ憎みて(けなし疎んじて)、

「すこしよろしからむことを申せ(もう少しマシな話しをしろ)」と責めたまへど(と式部をたしなめられたが、式部は)、

「これより(これ以上に)めづらしきことは(珍しい話など)さぶらひなむや(御座いまいしょうか)」とて(と言って)、をり(居直っている。すると座を執り成すべく、馬頭が口を開いた)。

「すべて男も女も悪ろ者(未熟者)は、わづかに知れる方のことを残りなく見せ尽くさむと思へるこそ、いとほしけれ(あさましいものだ)。

三史五経(三大史書と五大論文からなる漢学)、道々しき方を(の其々を万遍無く)、明らかに(詳らかに)悟り明かさむこそ(修めようなどというのは)、愛敬(あいぎやう、可愛げが)なからめ(無いが)、などかは(どうして)、女といはむからに(女だというだけで)、世にあることの(世に広く知られた)公私(おほやけわたくし、作法、一般常識)につけて、むげに(何も)知らずいたらず(知らぬ存ぜぬ)しもあらむ(で済む事があるか)。わざと(何も正式に)習ひまねばねど(学問しなくても)、すこしも(いくらか)かどあらむ人の(利口な人なら)、耳にも目にもとまること、自然に多かるべし。

さるままには(そうなると中には)、真名(まんな、漢字)を走り書いて、さるまじきどちの(漢字を使う用も無い同士の)女文に(おんなぶみに、女の手紙に)、なかば過ぎて(半分以上を漢字で)書きすすめたる(ものなどがあって)、あなうたて(おお厭だ)、この人の(そういう人の何と)たをやか(ものやわらか)ならましかば(さのないこと)と見えたり(と思ってしまう)。心地には(書き手には)さしも(そんな)思はざらめど(心算が無くても)、おのづから(自然に)こはごはしき声に(堅苦しい声で)読みなされ(読まれたり)などしつつ(などするので)、殊更びたり(ことさらびたり、妙に改まって感じられます)。上臈(じゃうらふ、貴婦人)の中にも、多かることぞかし(多く見受けられるところ)です)。

歌詠むと思へる人の(また、和歌を得意にする人の)、やがて歌に纏はれ(まつわれ、絡まれ)、をかしき(凝った)古言(ふるごと、昔の詩)をも(などを)初めより取り込みつつ(初めから織り込んで)、すさまじき折々(場も弁えず)、詠みかけたるこそ(詠んで寄こして返歌を求めて来るなど)、ものしきことなれ(迷惑なものです)。返しせねば情けなし(返歌しないと風情を壊すし)、えせざらむ人は(返せない人は)はしたなからむ(恥をかかされます)。

さるべき(正式の)節会(せちゑ、朝廷での宴席)など、五月の節(さつきのせち、端午の節句)に急ぎ参る朝(あした)、何の(まだ何の)あやめ(文目、歌の筋道)も思ひ鎮められぬ(おもいしづめられぬ、思い定め得ぬ)に(内に)、えならぬ(筋違いの)\*根を引きかけ(アヤメで発句してみたり)、九日の宴(ここぬかのえん、九月九日の菊の節句)に、まづ(此方が)難き詩(かたきし、難しい漢詩)の心を(の作詞を)思ひめぐらして(思い悩んで)暇なき折(余裕の無い時)に、菊の露(きくのかづゆ、長生きの水)を託ち寄せ(かこちよせ、こじつけた)などやうの(ようなものなどの)、つきなき(面倒な)営みに(詩作に)あはせ(付き合わせたりして)、さならでも(そんなことをしなくても)おのづから(自然に)、げに(実に)後に思へば(後で振り返れば)をかしくも(おもしろくも)あはれにも(しみじみとも)あべかりけることの(なったかもしれないことの)、その折につきなく(その場では折悪く)、目にとまらぬなどを(分かり難いものなどを)、推し量らず(そうと察しが付かず)詠み出でたる(詠んで来るのは)、なかなか(なんとも)心後れて(気が回らないように)見ゆ(見えます)。 \*「根」は五月五日の節句に菖蒲アヤメの根を邪気払いに使ったことからアヤメの縁語とされ、この「根」を歌に引き掛けて発句されると、菖蒲の連歌を促されてしまうらしい。

よろづのことに(何にでも)、などかはさても(どうしてそんな)、とおぼゆる折から(と疑問を感じたり)、時々(時には)、思ひわかぬばかりの心にては(どうにも判断しかねる時には)、よしばみ(知ったかぶりや)情け立たざらむ(思わせぶり)なむ(などしないのが)目やすかるべき(見苦しからずというものです)。

すべて(およそ)、心に知れらむことをも(知ってることでも)、知らず顔にもてなし(知らない顔でいて)、言はまほしからむことをも(言いたい事があっても)、一つ二つのふしは(いくつかは)過ぐすべくなむ(言わずに置くのが)あべかりける(良い心構えのようです)」

と言ふにも(と幾分説教めいた口ぶりになった馬頭の話だったが、そんな中でも)、君は、一人の御ありさまを(一人の方の御姿、とは藤壺宮を)、心の中に思ひ続け給ふ(つづけたもう、続けて御出ででした)。「これに足らず、またさし過ぎたることなく、ものしたまひけるかな(色々な話を聞いても、藤壺宮は何処と過不足なくして御出でだよなあ)」と(と其の人を思い描きながら源氏の君は)、ありがたきにも(改めて其の得難さを感じて)、いとど胸ふたがる(切なさに胸が塞がった)。

いづ方に(何処方に、どうという)寄り果つともなく(定まることなく、結論も出ずに話は続いて)、果て果ては(ついには)あやしきことどもになりて(愚痴や冗談ばかりになって)、明かしたまひつ(源氏の君たちは夜を明かされた)。